



ほづみ

郡山市立穂積小学校
学校便り No.14
令和3年7月12日
文責：校長 中澤修一

問題の答えです

前号で下記の問題を出しました。

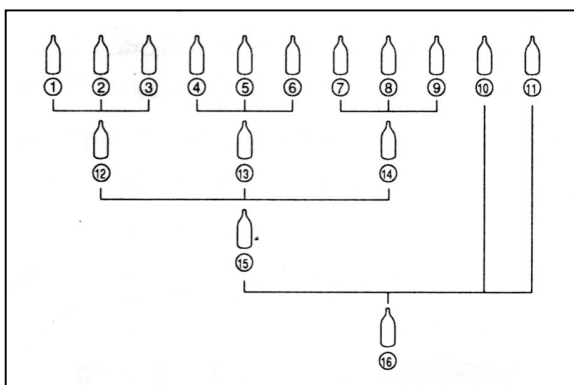
ジュースのあきびん3本でジュース1本と交換してくれるお店があります。

このお店でジュースを11本買うと、いったい何本のジュースを飲むことができますか？



このような文章題は、まず、図にして考えてみることが大切です。

下のような図で考えると、答えは16本であることがすぐわかります。



いきなり答えを求めようとせずに、

「～だから～になる」

「～にすると～になる」



というように、順序立てて論理的に考えていくことが、問題を解決する際には大切なのだと思います。

一般的に、小学生の段階では、その場の雰囲気流されてしまったり、思いつきで行動してしまったりする傾向があります。

教育活動を通して、生活の場でも学習の場でも「～すれば～になる（できる）」といったように、論理的に考えて行動できるような子どもに育てていきたいと考えています。

子どもといっしょに考えてくださった保護者様には、ご協力ありがとうございました。

子どもの目が輝くとき

子どもの目が輝くときって、どんなときでしょうか？

子どもたちの目が輝くときは、次のような状態にあるときではないかと私は考えます。

① 自分の先行経験では解決できない問題に出会ったが、それがもう少しで解決できそうなとき。

（算数の文章問題を解決しているときなど）

② もう少しで、今までの作品よりよい作品ができそうなとき。

（図工の作品を仕上げているときなど）

③ 友だちと競争して、もう少しで決着がつきそうなとき。

（チーム対抗のゲームをしているときなど）

④ 次々と新しい問題に出会い、自分の力でそれが解けてきた。この次の問題も、もう少しで解けそうなとき。

（理科の実験で自分で予想を立て結果が出たときなど）

⑤ 練習していたら、新しいことができるようになった。もう少しやればもっとむずかしいことができそうなとき。

（体育・音楽・家庭で、技能を身につけたときなど）

上記の5つに共通していることは、“もう少し”ということです。

もう少しで解決できそうな見通しをもったとき、子どもの目は輝くと言ってよいと思います。

逆に言えば、“もう少し”という状況をつくってあげることで、子どもの関心・意欲を高めることができるのではないのでしょうか。



夏休みの中でも、“もう少し”という状態がたくさんできると、子どもたちにとって有意義な時間となると思います。